

左京大夫顯輔

いかでわが心の月をあらはしてやみにまどへる人をてらさむ

〔倭訓栞中編八〕ころのつき。心月をいふ釋教也。

〔古今和歌集戀十五〕題しらす

よみ人しらす

しぐれつ、もみづるよりも言のはの心の秋にあふぞわびしき

〔古今和歌集戀十五〕題しらす

こまち

いろみえでうつろふ物は世中の人の心の花にぞありける

〔倭訓栞前編九〕ころのはな。心の花也、圓覺經に、心華發明、照十方刹と見ゆ、またあだなる意

にもいへり、

〔後撰和歌集戀十一〕ものいひ侍りけるおとこいひわづらひて、いかゞはせんなどもいひはなちて

よみ人しらす

よといひ侍ければ、
小山田の苗代水はたえぬとも心のいけのいひははなたじ

〔千載和歌集序〕しきしまのみちもさかりにおこりて心のいづみいにしへよりもふかく、ことば

のはやし昔よりも茂し、

〔倭訓栞中編八〕ころのひ。心火也、むねのほのほをいへり、略中

ころのこま。法苑珠林に、心馬情猿と見え、自鏡錄に、意馬情猿と見え、息心銘に、識馬心猿と見

えたり、略中

ころのとり。陶淵明が籠中の鳥を放ちたる故事よりいふ也。

ころのくも。心の雲也、まよふこと也。

ころのきり。心の霧也、胸霧をいふ、